

巻頭言

「作業」って何だろう

吉川 ひろみ

日本作業科学研究会副会長

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

本部の方針が明確に示されないまま企画書の提出を求められる。提出した企画書に対して、理解できない不備を指摘されて没となる。本部の意図を暗黙のうちに汲み取って企画書を完成させることを求められているような気がするが、何を目的にどのような企画を立てたらいいのかわからない。このような経験は、作業ができないばかりではなく、実際に作業を行った人々を苛立たせ、落胆させ、その後の類似作業に関与する意欲を失わせる。企画書作成段階で意見を聞いたり、企画書が通った時の内諾を取った相手に対しては謝罪をし、後悔と無念さが残る。成功することを想像した作業が、行われることもなく消えてしまった時の虚しさは、予測を超えたダメージを私自身に与える。

個人的、文化的に意味をもつ作業が、人を健康にし、幸せにする。誰が行う誰の作業かわからない作業には、個人的に意味をもつことができない。上記の例では、「(企画が通った人は) 何度も会いに来た」と聞いた。この組織の文化では「何度も会う」という人間関係が、企画書を作成する作業には不可欠らしい。社交的な会話をこなし、自己主張せず、上司の言葉には肯定的な感情をもったことを示さなければならない。私には馴染みのない文化だし、個人的には受け入れ難い。馴染むことができない文化で個人的に意味を見出せない作業は、人を不健康にし、不幸にする。

私が作業科学と倫理学を学んでいなかったら、ここまで不幸にはならなかったと思う。作業は、その作業を行う主体となる人が、みずから意味を感じ行うものだという強い信念が、私の生活のあちこちで具現化している。家庭や職場でも、その作業をする人に意味があるかを、自然に考えている。資料の印刷や物を運ぶことだけを頼むことはしない。他人の援助が必要なときは一緒に行くことを心がけ、その人の意思を確認する。「手段としてのみ人を扱ってはならない」(カント)、「自分自身の尊重」(ロールズ)という考えに同感だし、この考えをもつ社会を目指していきたいと思っている。自分勝手なわがままではなく、自律的に考えて決めた行いを通して、自分自身が成長できる。すべての人が、作業をすることを通して、よりよい状態になっていくことができる社会、つまり作業的公正 (occupational justice) が実現する社会が理想である。

「かばん持ち」として出世してきた人や、階層組織を維持するためのシステムが整備されている集団とは、私の価値観は異なっている。組織や国家のための滅私奉公を強いる社会の持続を望んではいけないからである。価値観の異なる人や集団同士が平和的に何かを成し遂げるには、工夫が必要である。まず、価値観を同じにしてからと考えるよりも、どの作業をするかを決めた方がよいと思う。作業から始めるトップダウンアプローチは、ここでも役立つ。

今年の2月『『作業』って何だろう』という本が出版された。わかりやすく書いたつもりだったが、ネット書店の書評に「英語直訳調で文章が長く残念だ」という投稿があった。書評を書いた人にとってはそうなのだろうと、びっくりした。その書評を読んだ知人から、どれほどひどいかと思って読んだ、書評を投稿したから見るようにとメールが来た。作業療法の本質がわかる良書というコメントだった。人の評価はさまざまと実感する出来事だった。評価の基盤となるのは、自分自身の価値観である。価値観そのものを見ることはできないが、具体的にその人が何に対して何をすることに現れる。自分の価値観を知り、生きる場所の文化を知り、折り合いをつけながら、意味のある作業を通して、自分も周囲の人々も平穏を保ちつつ、改善の方向に向かえたらよいと思う。

作業科学の文献を読み、自分の経験と照らし合わせることから、作業って何だろうの答えをたくさん学ぶことができる。作業の多面性と価値に関心をもつ人々にとって、日本作業科学研究会が価値ある存在になることを願っている。